
FFCCエコーズオブタイム

隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FFCCエコーズオブタイム

【Nコード】

N2602V

【作者名】

隼

【あらすじ】

ナミッチはあるゲームをやり・・・そして救いたいと思った。

あまりにもかわいそうで・・・
ハッピーエンドなんかないような・・・

そこで、招待するということで救いたいと思った

本編に戻れ！という突込みしかできなくなるようなはっちゃめっちやな物語。

消えてほしくないから。(前書き)

本編に戻れっ!!

消えてほしくないから。

ナミッチがDSILLを片手に持ち、やっていたゲームを閉じた。

ナミッチは大きく息を吸い込み：

「ラーケイクスクたばれーっ！」と

大地が揺らぎガラスが碎けるほどの大声で叫んだのだ。

地獄耳のクラは気絶しそうになり、ふらついている。

「煩いな…何があった。」

そんな中でも冷静なレジェンドは冷めきった瞳でナミッチを睨んだ
ナミッチはぶすくれている

「あのねっFFCCエコーズオブタイムのねーお師…好きなキャラ
クターがねーラーケイク…うざいジジイにね…殺されたの」
レジェンドの冷めきった眼差しが少しだけ優しさを見せた。

「好きなキャラクターか…しかも殺すねえ…」

うんと頷き、仕方ないかと呟いた。

何時ものことだからだ。

「そこでっ！ヘルメス」

なにも居ない空間にナミッチが声をかけた。

空間がゆがみ、幻覚がとかれ、一人の男が姿を現す。

ヘルメスは面倒くさを欠伸で表現しながらなんだよ…といっ

た。

ナミッチはニイっと笑い言い放った。

「なんとかしてあのセカイの人々を連れてきてほしいの」

「はあ？」

ナミッチは本気だった。

ヘルメスはやれやれという表情をうかべ分かったといった。

――――

主人公の名前はドクロ・・・今はマルチプレイなので仲間のレーツも一緒だ。

今、まさにウアルトリールとエリルが消える瞬間だった。

そのときにヘルメスはやってきた。

周りに彼の姿は見えていない

ヘルメスはすうっと息を吸い・・・ある魔法をかけた。

ここで死んだ魂はピー村に行き、そして・・・

後は別の人が説明してくれるだろう・・・

消えてほしくないから。
(後書き)

続くと思う、いや続く！

攻略本でも一箇所しか出てこないくらいのわきキャラが大好きなんだよ！（前妻

タイトルが長いとか言わないの！

ウアルトリールが大好きなの！

でも・・・今はドクロさんが好きなの^^

攻略本でも一箇所しか出てこないくらいのわきキャラが大好きなんだよ！

浄化された魂は、永遠というかこの中から飛び出し・・・すべて消えていくはずだった。

とある悪魔のいたずらによって消えるはずの魂は・・・すべて神が管理する村へ・・・。

目を開けた・・・

そこには緑の森が遠くに見え、底が見えるほど透き通っている川の水、そして、大きな木・・・
薄緑に輝いている・・・

空は澄んでいて、空気がきれいだ・・・この世のものとは思えない。

そんな中にウアルトリールは立っていた。

8

エリルもリアンもイリーナもトウムリーもフェルフルも・・・
バチエンもトラトもウルズもオルジィも・・・
シエルロツタも・・・

そして、滅んだはずの村も・・・

「一体・・・どうなってんだ？」

驚きを隠せないという様子であたりを見渡し・・・
彼を見つけた。

「ようこそピー村へ」

彼は髪の毛が長く・・・どこか懐かしく、新しい感じがする。

皆さんご存知のように、クラのことを言っている。

「ここは・・・どんなところなんだ？」

シェルロットがたずねた。

クラはすこし悩むようなしぐさをして言った。

「天国とも言う、地獄とも言う・・・あるいは極楽・・・あるいは現世・・・」

クラはうなずき続けた。

「まあ、一般的には神の住む村といわれている。」

事情が飲み込めないのはシェルロットだけではないようだ。

だが、特に何もないので相手は悪いやつではないようだ。

むしろ笑顔で、優しい癒しのオーラがある。

「分からないことがあったら何でも聞いてくれ。」

クラはそう告げて去っていった。

「・・・。」

何かもう特に害はないようなので驚きながらもしばらく様子見することにした。

—————

ヘルメスは暇そうにその様子を眺めていた。

ナミッチが好きなキャラはどれだろう、ウアルトリールということ

は分かっているが、それが誰かが分からない。

気は進まないが心を読み、相手の気持ちや特性を探りあて、ウアル
トリールを探し当てた。

「ふうん・・・」

想像とは少し違っていたがまあいい。

ヘルメスは背伸びをしてその村の方にむかっていった。

攻略本でも一箇所しか出てこないくらいのわきキャラが大好きなんだよ！（後妻

次からは小説っぽくなくなります。

ヘルメス「こんな感じになるんだよな。」

ナミツチ「そうなのです。」

クラ「このほうが確かに分かりやすいけど・・・」

レジェンド「・・・」

隼「ま・・・まあん・・・良いんじゃない？」

次回もお楽しみにって見てないかWWW

動き出した時間（前書き）

ナミツチ「やっぱりこの書き方やめたW」
クラ「やめるの早いし…」
隼「あはははは。」

動き出した時間

「やあ、新入りかい？」

ふと見るとそこに人がいた。黒い翼に悪戯っぽい笑みをうかべている。

「主は…」

ウアルトリールは相手がもつ違和感、それとただならぬオーラを感じ取っていた。

危険な気がした。

「俺か？俺はヘルメスだ。お前がウアルトリールだな？」
相手はニイツと笑って見せた。

「安心しろ、俺はお前をとって食ったりしないよ。」

「…。」

危険なオーラは彼に元々あるものらしい。

今さら気がついたが、彼は悪魔だ。

気がつかない方がおかしい。

枯れの背中には漆黒の翼が二枚、きっちりと生えている。

それだけならまあ悪魔とは断定しがたい、しかし

先ほども述べたように、ただならぬオーラを感じる、危険なオーラだ。

ユーク族の俺だからだろう、あのオーラは悪魔特有のオーラだとわかったのは。

彼は微笑み言い放った。

「信じたくないなら信じなくて良いぞ」

「普通そんなことを言うか？」

あきれたというより驚いた。

初対面の人に向かって信じなくて良いとか普通ないだろ。

「ん：まあ良いじゃないかw」

この適当さが常識にとらわれない悪魔っぽい。そう感じてしまう：

彼は俺に何か疑問に思ったことはないかとたずねてきた。

俺は前から気になっていたことがあった。

ここになぜ実体としていられるのか。

「なぜ実体を持っていられるのだ？」

彼はまるで知り尽くしているかのように答えた

「ここはクリスタルがある。お前らはもともとクリスタルによって実体化していたのだから

クリスタルがあれば実体化する：それだけだろう？」

何もいえない：

まず、クリスタルが存在していること事態に疑問がわく。

ここは俺の知っている世界とはまったく違うらしいな：

向こうでは最後に残ったクリスタルコアさえ失い、永遠から開放され：

結局クリスタルなど存在しなくなったのに。

ここにはあるというのか。

相手が何か思いついたかのように言った

「実物を見れば信じるか？」

動き出した時間（後書き）

気にしない気にしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2602v/>

FFCCエコーズオブタイム

2011年10月9日01時03分発行